

目次

《巻頭言》	1
JEA 活動報告	2
福音主義とは何か	3
宣教フォーラム福島	4
流れのほとり	5-6
フィリピン台風被災地訪問	7
災害対応支援プロジェクト	8



レイテ島オルモック市の牧師会リーダーで、貧民地区で伝道するエリック牧師とご家族。背景は被災したままの牧師館。牧師館修復用に支給された建築資材を家を失った教会員たちに分け与え、自分たちは屋根と壁が残った教会堂に寝泊まりして生活している。（P.7 に関連記事）

地域教会ネットワークが生きる時

2013 年 11 月 8 日、史上最大勢力の台風 30 号がフィリピン中部を直撃。レイテ島を中心にサマル島、セブ島など、多くの地域が猛烈な暴風雨にさらされて各地で洪水や土砂崩れなどによる甚大な被害が発生。

被害が大きかったレイテ島のオルモック市の教会はどこも全壊、屋根が吹き飛ばされるなどの半壊、浸水の被害を受けた。それぞれの牧師館も大きな被害を受けて牧師たちも被災した。降り続く雨の中、牧師たちは互いに安否を問い、声を掛け合い、一つ所に集まった。そして駆けつけたフィリピン福音同盟の支援者と共に涙を流して祈り、励まし合い、助け合いながら一つとなった。フィリピン福音同盟からの支援はこの牧師ネットワークを通して、効果的に地域教会と牧師へ、そして地域へともたらされた。

2 回目に集まったとき牧師たちはそこに主が共にいてくださることを確信したという。そして、3 回目の集まりに同席させていただいた（下の写真はその時のもの）。被災した 11 名の牧師によ

て、次々に台風の災害を通して現われた神様の祝福の御業が証しされ、大きな笑いと喜びに溢れて御名があがめられた。そこで高らかに宣言された「私たちは被災者じゃない、勝利者だ」との言葉は確信に満ちたものだった。

残念な例も報告しなければならぬ。同じくレイテ島のタクロバン市、ここも甚大な被害を受けた町。この町はオルモックよりも大きく、多くの教会があるが、それらの教会は一つにまとめることができないでいた。海外から多くの支援の働きが入ってきても、地元教会の受け皿となるネットワークがないために、それぞれバラバラな働きで効果的な統率の



JEA 援助協力委員長
松本 順
日本ホーリネス教団
上野教会牧師

取れた支援ができない状態が続いていた。

オルモックでは、台風前から地域教会の交わりのネットワークがあったことで、台風被災直後から、牧師たちが一つのキリストのからだとして慰めと回復に与り、愛の業に生きることができた。

今回フィリピンの台風被災地域を訪問して、普段の近隣教会との交わり、地域教会ネット



レイテ島オルモック市牧師会の先生方、フィリピン福音同盟総主事テンデロ師（前列右から二番目）、バントーハ災害対策ディレクター（後列中央）と共に

（P.8 に続く）

JEA 活動報告 (AEA, WEA 関係を含む。災害対応関係は P.8 参照。)

■首都圏大震災・教会ネットワークセミナー

2013 年 10 月 8 日(火)、日本ホーリネス教団上野教会で、「首都圏大震災に備えるー教会ネットワークづくりセミナー」(DRCnet 首都圏災害プロジェクト主催、JEA 援助協力委員会・クラッシュジャパン共催)が開催され、約 50 名が参加した。栗原一芳師(クラッシュジャパン次期東京災害対策担当)が首都圏大震災の被害予測と対策について、松本順師(JEA 援助協力委員長)が教会防災ネットワーク形成の理念と実践について、ジョナサン・ウィルソン師(クラッシュジャパン代表)が災害時の弱者支援について発題した。昼食時には自衛隊と同じ給食機材をもつ救世軍のキャンティンカーによる焚きだしの実演が行われ好評だった。自分の地域で防災教会ネットワークを立ち上げるためのツール(DRCnet の首都圏災害対応プロジェクトのページ参照)なども紹介され、この日の参加者の中から板橋地区などで防災地域教会ネットワーク立ち上げの動きが始まっている。

■第 25 回信教の自由セミナー、キボコク2

2013 年 10 月 31 日、お茶の水クリスチャンセンターで、第 25 回信教の自由セミナー(JEA 社会委員会主催)が開催された。「憲法改正が目指す国～戦時下の教会は何を体験したか」をテーマに、太平洋戦争中、父親が治安維持法違反容疑で投獄された作家の石浜みかる氏が講演を行った。当時と現在の状況が類似していること、自由民主党による憲法改正案の問題点などをあげ、キリスト教会が歴史の教訓を学び、目の前の信教の自由を守る戦いに覚悟を決めて取り組む必要があると語った。また特定秘密保護法案に関連して、「希望を告白する夜(キボコク)2」(KGK 学生宣教局主催、2014/12/12 に OCC で開催)について、JEA 社会委員会および青年委員会が後援し、当日参加者 230 人に加えインターネット中継で 1,000 人以上が視聴参加した。

■宣教フォーラム・福島

2013 年 11 月 18 日(月)～19 日(火)、福島県郡山市のビッグパレットふくしまを会場として、「宣教フォーラム・福島～フクシマと生きる宣教」(福島県キリスト教連絡会(FCC)・JEA 宣教委員会の共同開催)が行われた。予想を上回る 150 名以上の参加があり、そのうち約 3 分の 2 が県外からの参加者だった。この時の分科会で、岩手、宮城、福島、茨城の各地域教会ネットワーク代表者が顔を合わせたことをきっかけに被災 4 県の教会ネットワークが立ち上げられつつある。フォーラムの内容は「フクシマと共に生きるー宣教フォーラム・福島より」としていのちのこば社から 2014 年 3 月に出版された。★詳しい報告は P.4 ～ 5 参照。

■フィリピン台風被災地訪問

2013 年 11 月に巨大台風の直撃を受けたレイテ島、セブ島北部などの被災地域を 2014 年 1

月 21 日～25 日、松本順援助協力委員長、岩上敬人委員、品川謙一 JEA 総主事が、フィリピン福音同盟(PCEC)のエフ・タイム・テンデロ総主事、ダン・パントーハ災害対策ディレクターらと共に訪問した。被災地での支援状況を視察し、JEA 加盟教会からの支援金 15,000 ドルを渡した。★詳しい報告は P.1 および P.7 参照。

■第 2 回 NSD セミナー

2013 年 2 月 3 日夜、お茶の水クリスチャンセンターで、第 2 回 NSD セミナー(JEA 青年委員会主催)が行われ、約 40 名が集まった。「教会を建て上げる若者を育てるために」と題して、吉澤慎也 KGK 東海地区主事が講演し、教会と学校で価値観を使い分け、信仰と生活が二元化・分断化したクリスチャン学生たちの現状から、日常生活の現場で共に聖書を読み祈る地道な活動が大切だと語った。NSD セミナーは 2012 年 9 月の日本青年伝道会議(NSD)でつながった青年宣教のネットワークを拡げていく目的で継続して開催されている。

■第 3 回東日本大震災国際神学シンポジウム

2014 年 2 月 15 日(土)、17 日(月)の両日、お茶の水クリスチャンセンターにて、第 3 回東日本大震災国際神学シンポジウム(DRCnet、東京基督教大学、聖学院大学主催、フラー神学大学院、ホートン大学共催)が開催された。3 年目のテーマは「苦難を通し、壁を越えて、次の世代へ」で、東日本大震災の経験から学び、キリストの教会を建て上げていく神学的発題と議論が、カトリック、主流派、福音派の枠を越えた発題者による講演、パネルディスカッション、分科会を通して展開された。特に今回は 17 日の次世代向け集会で KGK(キリスト者学生会)と SCF(学生キリスト教友愛会)が協力したこと、フラー神学大学院に加えて、JEA と緊密に協力しているホートン大学人道的災害支援研究所(HDI)から二名の講師が派遣されたことが特色であった。15 日は前日からの記録的大雪で開催そのものが危ぶまれた中で 80 名が集まり、17 日の次世代集会には予想をこえる 120 名以上が参加した。

■日韓教会協力会議 2014

2014 年 3 月 10 日(月)、JEA と 20 年以上の協力関係がある韓国福音主義協議会(KEF)から約 20 名が来日し、東京都内で「日韓教会協力会議 2014」(JEA 東日本大震災対策室主催)を開催した。日本側、韓国側それぞれ三名ずつの発題があり、互いの視点を学び合い、交流を深める時となった。

■世界福音同盟(WEA)総会延期

2014 年 10 月に韓国ソウル市で開催予定だった世界福音同盟(WEA)総会は、韓国内の福音的教会が事実上の分裂状態であることなどから韓国での開催を断念し、延期されることとなった。



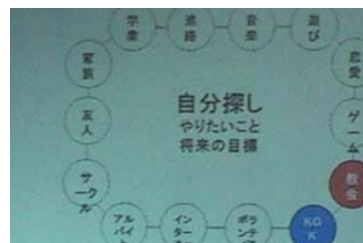
首都圏大震災・教会ネットワークセミナーで発題する松本師、ウィルソン師、栗原師



第 25 回信教の自由セミナーで講演する石浜みかる氏



宣教フォーラム福島分科会。被災各地域の教会ネットワークによる働きを分かち合った。



第 2 回 NSD セミナー：学生たちの生活の現状を表した図。教会(信仰)は一部分にすぎない



第 3 回東日本大震災国際神学シンポジウム 2/17 の次世代集会に 120 人が参加した



韓国福音主義協議会(KEF)から約 20 名が来日し、日韓教会協力会議が開催された



牧師の本棚：福音主義とは何か

福音主義を考えるための参考文献紹介

JEA 神学委員 鞭木由行
聖書神学舎

2009 年札幌での伝道会議後から神学委員会に関わることになりました。委員会に出席し始めた頃は、創造進化やゲノムが話題でしたが、そのうち福音派として原発に関する立場を表明すべきということになり『原発と私たちの責任』（21 世紀ブックレット 49）への寄稿が初仕事となりました。これで一段落と思いきや、今度はホットな話題である「福音主義」を取り上げることになりました。「福音主義とは何か」とは古くて新しい問いです。福音主義は、自らのアイデンティティーを絶えず問い続け、再定義し続けていかなければならず、私たちがそれを怠ると、いつでも本来の姿を見失ってしまう危険があります。同じ用語を用いながら、実は全然違う会話をしていたということになりかねません。

福音主義というとき、私が最初に思い浮かべるのは古代の正統的信仰に立つ公同的信条です。「牧師の本棚」として、J. N. D. ケリー (Kelly) の 2 冊の本を紹介したいと思います。一つは、古代の信条の成立と内容について書かれた Early Christian Creeds (Continuum 2006) と初代教会における教理的発展を記した「初期キリスト教教理史」（一麦出版）です。古代に成立した神論、三位一体論、キリスト論などは、福音主義の根幹ですが、今日の福音派は、そこからさえも逸脱しかねないような状況があるのではないかと危惧しています。

福音主義の系譜にとって、もうひとつの重要な歴史的契機は、宗教改革期の救済論と教会論でしょう。巨大なカトリック教会を否定した後、改革者たちに求められたのは、教会とは何かの再定義でした。彼らは異口同音に教会の本質を「みことばの説教と聖礼典」とに求めてゆきました。そして、アウグスブルク信仰告白やウエストミンスター信仰基準などに彼らの信仰を結実させたのです。今日福音派の教会は、教会の本質をどこに求めているのでしょうか。説教と礼典はおろそかにされてはいないでしょうか。日本の福音派の特徴（弱点?）は、明治期以来簡易信条によって成立していることでしょう。外国からの影響を廃止し、日本における教会の合同を優先させるために必要だったのですが、それが、その後の福音派教会を形成するルールとなったのは残念なことでした。宗教改革期の信条をどのように評価するかは福音主義の立場に立つ者にとって決して避けて通れないことです。

福音主義にとって歴史的にもっとも新しい問題は聖書論です。特に JEA の前身の一つであるプロテスタント聖書信仰同盟はもともと

「聖書は誤りなき神のことば」としての聖書信仰を守る団体でした。しかし、最近では「聖書は神のことば」とは言っても、「誤りなき」が入らない場合も増えてきました。聖書の無誤性に対する批判は、それが演繹的主張であって、帰納的結論ではないということでした。そして、そのような批判の背後には、過去 150 年間に渡って聖書の研究を阻害してきた批評学がありました。無誤性と無謬性を分離したり、批評学の成果をどれだけ受け入れることができるのかということが、福音派にとっても大きな課題となってしまったのです。福音陣営から出版された聖書辞典や注解書がどこまで、批評学を受け入れたかを検討することでは、この種の問題を解決することはできません。

資料説に立つ聖書批評学が根拠としていた諸前提は、暫く以前から古代オリエントの文献学者からさまざまな疑問が向けられていました。そのためにすでに膨大な出版物がありますが、ここで紹介したい最近の本は、私の恩師でもある K. A. キッチン (Kitchen) 教授の On the Reliability of the Old Testament (Eerdmans 2006) です。彼は著名なエジプト学者ですが、福音主義の立場に立ち、一貫して聖書の権威を弁護するためにも出版を続けてきました。すでに日本語に翻訳された「古代オリエントと聖書」（1979 ことば社）がありますが、この新書では全てをアップデートして、年代順に遡りながら、さらに議論を深めています。キッチン教授がよく言っていたことは、「全体を扱わないとだめだ」ということでした。古代の宗主権条約の形式から年代を論ずることは、メンデンホール以来様々な形で取り上げられましたが、キッチン教授は、その後 Treaty, Law and Covenant in the Ancient Near East (Otto Harrassowitz 2012) を出版しました。それは 3000 年間にわたる古代オリエントの条約、法律、契約を全て集め原語で提示し、それに英訳と注解を添えた三巻本です。そこにも全体を扱う、彼の徹底した学問の姿勢が見られます。

このような努力の積み重ねによって、近年聖書批評学の崩壊と終焉が起きています。そのしがらみから解放され、福音主義は、再び「聖書は誤りなき神のことば」という伝統的聖書観に立脚しながら、自由に聖書神学を構築することができるようになったのです。誰が何を言ったかではなく、聖書が何を言っているのかを自ら探求していく以外に、福音主義が福音主義に留まる手段はないでしょう。

フクシマを共に生きる～3.11はまだ終わっていない

JEA 宣教フォーラム・福島 報告

JEA 宣教委員 増田哲之
日本アッセンブリーズ・オブ・コッド教団
シテビジョン・グローリーチャー

2013年11月18日～19日、JEA 宣教フォーラム・福島 (JEA 宣教委員会・福島県キリスト教連絡会＝FCCによる共同開催) が「フクシマと生きる宣教」というテーマで行われた。会場は福島県郡山市のビックパレットふくしま。参加者151名中、福島県内からの参加は50名で、全体の2/3が県外からの参加だった。また教派、教団をこえて福島県内にある教会の約1/3から参加があり、会場はいっぱいであった。主要なプログラムについて報告する。

開会礼拝：安藤能成 JEA 理事長が、ローマ8:18～24より「神に造られ愛されている世界」のテーマでメッセージを語った。原発を推進する日本政府は、国家の利益のために個人の人權を制限する方向性に向かっている。現在の福島状況はそのような論理の結果。「神を愛する人々」(ローマ8:28)は神が愛しておられる世界を神が愛している正しい姿に回復していく責任がある。福島に現れている日本社会の問題に、すべてのキリスト者が、この世で神に仕えるという自覚と責任をもって関わり行動することが求められている。



避難所にもなったビックパレットふくしまに
県内外から150名以上が集まった

「フクシマの声を聞く」

では、震災直後の経験と現在の状況を三人の証言者が語った。金成孝悟師(内郷キリスト福音教会)：被災直後に「伝道のチャンスですね」と言われて傷ついた。支援と伝道の狭間で悩み

ながら続けてきたが、地域の人から「キリストさんが来た」と言われ、教会に対する信頼が増したことは嬉しい。山本真理子師(福島 HOPE プロジェクト)：放射能に関してさまざまな情報が飛び交い、人々が分断された。子どもを守るために離れ離れに生活した結果、離婚家族が増えた。正しいと言われていた情報が後で違うと言われ、事故発生当時の行動を後悔する母親たちがいる。子ども保養プログラムで、子どもたちとその家族をサポートしていきたい。高橋拓男師(会津聖書教会)：会津は津波被害もなく、放射線量も高くないから大丈夫と思われ、支援が届かない。しかし原発近辺の約3,000人が会津で避難生活をしており、支援の継続が必要。

主題講演では、木田恵嗣師(郡山キリスト福音教会・FCC 委員長)が、福島を表す3つのキーワード「不安、分断、麻痺」について語った。放射能について情報が複数あることは、家庭が分断されていくことを意味する。毎晩、夫婦、親子で喧嘩になる。若者は30年後に影響がでると言われ、冷静でいられない。ある避難所は温泉付きで食事も良く、他の避難所は弁当だけである。その結果、心に分断が生じる。震災より2年半が経ち、心は麻痺し、慣れてしまう。放射線の線量計も、市の表示と自分たちの線量計の数値が違う。自分たちの方が数値が高く出る。数値データが調整されていると思われる。それは行政に対する不信となる。

分科会は以下の5つが開催された。①「福島に生きる女性の声を聴く」：震災後を生き抜いているふたりの女性＝[久場祥子師(北信カルバリ教会)、後藤一子師(相馬キリスト福音教会)]の心の思

いに耳を傾けた。②「教会ネットワークの将来を考える」：被災各地域の教会ネットワーク＝[福島県キリスト教連絡会、宮城宣教ネットワーク、良い業・宣証プロジェクト21、3.11 いわて教会ネットワーク]の活動と課題を分かち合い、これからの方向性を互いに祈り合った。

③「ユースの働き、つながりに光を当てる」：震災ボランティアなどを通して、若者達が何を考え、どう成長していったかに耳を傾けた。④「震災支援に潜むカルトを探る」：震災支援にカルトがどう関わっているかの情報共有をし、注意点などについて学んだ。⑤「国際人宣教協力：福島



「福島に生きる女性の声を聴く」分科会

からアジア、そして世界へ」：福島での国際人の動向、世界とのつながり、宣教協力などを整理し、課題を探った。

一日目夜の公開集会では、福島 HOPE プロジェクト事務局長を務める朝岡勝師(徳丸町キリスト教会)が、ニカイア・コンスタンティノポリス信条に言い表された教会の唯一性、聖性、公同性、使徒性を手がかりに「福島と共に生きる教会論」について講演した。主イエスがマルコ6章で弟子たちを「ふたりずつ遣わし始め」られたことに触れ、何の役に立てるかかわからない、しかし一緒に行けと言われていたのだから、福島の教会と共に歩み続ける教会でありたい。そこに主が共にいてくださる、と結んだ。証：塩津由扶子師(ふくしま HOPE プロジェクト)、金成美貴師(いわき放射能計測所前スタッフ)

二日目午前中のパネルディスカッションでは「フクシマの今を考える」のテーマで四人のパネリストが発題した。上代謙師(兄弟団福島教会・四倉教会)：被災直後に教会ネットワークが立ち上げられたことで、互いに支え合う仲間、外からの支援・情報の入口ができた。被災地の教会は、何の準備もないまま、被災者であり支援者でもある難しい立場に立たされる。何をしたいかわからない、やるべきことができていない、自分の疲れに気づかない、決断し続けなければ



主題講演を語る木田恵嗣 FCC 委員長

ならない、などのストレスにさらされる。これに備えなければいけない。住吉英治師(勿来福音キリスト教会)：仮設から行く場所がなく希望を失っている人が多い。教会は最後まで寄り添うと決めている。支援をしながら、未信者

を伝道の対象者ではなく、その人自身を愛すべき相手として見るようになった。支援活動の神学的・宣教論的位置づけが必要だと感じている。片岡輝美氏(若松栄町教会・会津放射線情報センター)：震災前から「九条の会」で、緊急時に国家は国民の命を守らないことを学んできたので、自分たちが「放射能から子どものいのちを守る会」を立ち上げた。原発事故は今も危険な状態が続い

流れのほとりて

JEA 女性委員会担当理事 金本 悟
日本神の教会連盟 練馬神の教会

2014年は私にとって「女性委員会の担当理事」として三年目となります。昨年の2013年には、父の死や次女の長女の誕生など、改めて人生の流れを感じています。老いていく母を見守りつつ、新しく産まれた孫の笑顔に何とも不思議に癒されつつ、神の恵みの中に生きています。

そんな私の人生の流れの中で、「レジェンド」という言葉を聞く機会がありました。最初は、日本で長い間宣教師として奉仕してくださった方に対して、後輩の宣教師の方が使っていました。もう一回は、父がモスクワ大学で盗難に遭ったときに盗んだ方のために祈ったそうですが、その出来事が大学の先生方の間で「ロシア人の魂」を教えた日本人と語り継がれているとの弔辞を聞いた時です。その逸話は Williams 半田郁子先生もある文章に載せてくださっており、同先生を通して知り合ったご主人の Mark Williams 先生（秋田国際教養大学）には、東京基督教大学の広瀬薫先生、東京聖書学院の中西雅裕先生、東京ミッション研究所の東條隆進先生と共に東京ミッション研究所2014年冬のフォーラムで「今の時代のリーダー育成」について話し合ってくださいることになりました。

一見、「悪の悪」と思われるようなことに直面しても、主を見上げ“敵”のために祈るとき、聖霊による良き流れが生まれるのだと教えられます。

父なる神は、独り子であるイエス様を十字架に架けられるという「産みの苦しみ」をしてくださいました。弟子たちは、イエス様を裏切ったことを知り、その罪を復活の主との出会いの中で赦され、復活の生命をまといながら生きていくことができるようになりました。聖書を読みながら、悪に直面しても祈りつつ、聖霊に導かれながら復活の生命を伝えたのです。そして今、私たちもまた弟子たちの一人として、それぞれの場で「産みの苦しみ」をしつつ大きな流れの中で生かされているのですね。

イエス様の働きが「産みの苦しみ」を知っている JEA 女性委員会をとおして、豊かに豊かに日本の教会を潤していくようにと祈ります。そこに生かされている男性も女性も、老いた者も生まれたばかりの者も、神の正義と神の愛とを豊かに経験し、神の平和を生きるようにと祈ります。そして、神の国が広がり、流れのほとりにいる者たち皆が豊かな実を結んでいくようにと祈ります。

私たちは、そのような大きな流れのほとり（詩編1：1～3）に植えられていることを神様に感謝します。



ている。食品放射能計測、しゃべり場、保養プログラムなどを通じて、寄り添う支援を続けていきたい。斉藤善樹師（東京聖書学院教会）：原子力技術は戦争から始まった。原発開発の背後には利権や欲望がからみあっている。原子力技術そのものが悪というよりも、それが人間の貪欲の対象になることで悪になっている。貪欲の対象になっているかぎり人への被害は軽く見られ、現実の危険が甘く見られる。罪によって歪められた欲望を制御し、神が本来意図された世界の秩序を回復していく努力をしていきたい。

福島県キリスト教連絡会委員長の木田恵嗣師は、「世代交代をする教会が多くあります。しかし、若い牧師は福島には送られて来ませ



福島のために共に祈る参加者たち

ん。若い人がどのように、福島で生きていくのか、それが描きにくいのです。支援ばかりしないで、伝道してほしいと言われる。福島の叫び、問われていることを、しっかり受け止めなくてはならない。

変化しなくてはならない。これが、これからの日本の宣教を左右するのではないだろうか。」と語られた。

閉会礼拝では、末松隆太郎 JEA 宣教委員会委員長が、ルカ 10:29～37 から「隣人とは誰か」をテーマにメッセージを語った。「あなたも行って同じようにしなさい」と言われて出て行くけれども、実際それができない自分に気づかされる。実は私自身が傷つき倒れている存在であり、主の憐れみによって助け起こされ、癒しを受け取らなければならない。不完全な者を愛し用いてくださる主に感謝しつつ、福島の教会共に歩ませていただきたい。

三日目は、オプションプログラムとして、被災地見学の時が持たれた。参加者 8 名で三春町にある仮設住宅を訪問した。豊岡町からの避難者 1 万 6,000 名（そのうち津波被害は 18 名）で、10 回ぐらい避難先を転々として仮設に落ち着いた人もおられた。将来に関しては 99% の不安があるとのこと。

以上 3.11 より 2 年半経過した現在、なお進行中である問題が語られ、震災はまだ終わっていないということを実感し、支援の仕方、質は変化しても、なお支援と祈りが必要であることを感じた。

*** サンデーランチ ***

JEA 女性委員 阿部恵子
 コングリゲーション・オブ・イングリア・チャーチ
 相模原グレースバール

★サラダ寿司

ごはんをサラダ風にして、一品でおおよその栄養がとれます。サラダ寿司は、家庭集会のランチで家庭を開放して下さっている方がごはんを用意し、出席者が具を分担して持ち寄りますので、並べて各自取り分ける簡単さが良いです。

【材料】

ごはん、ツナ缶、いり卵、カニカマ、キュウリ、せん切り人参、すりごま



★ライスサラダ

【材料】

ごはん、すし酢、オリーブ油、鳥肉、レタス、キュウリ、ミニトマトまたはパプリカ、くるみ、お好みでパイナップル缶、レーズン

【作り方】

- ① ごはんは寿司飯と同じで、やや水を減らして炊く。
- ② すし酢にオリーブ油を少々混ぜ、ごはんと合わせる。
- ③ 鳥肉を一口大に切り、炒めておく。
- ④ レタスをちぎり、キュウリはスライスし、ミニトマトは半分に切る。
- ⑤ くるみをオーブントースターで軽く焼き、手で砕いておく。
- ⑥ ごはんには鳥肉、レタス、キュウリ、トマト、くるみをさっくり混ぜて盛り付ける。



いのちのパン

JEA 女性委員 藤木真木子
 同盟基督教団 北総大地キリスト教会

「ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい。そうすれば、私が行って会うにしても、また離れているにしても、私はあなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音のためにともに奮闘しており、」

ビリビ人への手紙 一章二十七節

みことばはこの後、あなたがたはキリストのために信仰と共に苦しみを賜ったと続きます。パウロがそうであったように、キリスト者の生きる世界には多くの戦いがあり、課題があります。何か解決の方法はないかと、新しい教えや画期的な方法に期待することを聖書は勧めていません。むしろ、いつの時代にも「同じ戦い」（30節）があることを伝え、「ただ一つ」キリストの福音にふさわしい生活をするように勧めています。

福音にふさわしい生活とは、御国の民の生活（＊別訳）です。天の国は、神がいのちを相続した者たちと共に住んでくださる所、神のみが栄光をお受けになる所です。つまり、御国の民の生活とは礼拝の生活と言えるでしょう。

主日毎の礼拝を真心から捧げる一年にしてゆきましょう。

地域の人々と共に苦しみ仕える

フィリピン台風被災地訪問の報告

JEA 援助協力委員 岩上敬人
イムマヌエル綜合伝道団 狭山教会

2014年1月21日（火）～25日（土）JEAからの派遣で、総主事の品川謙一先生、委員長の松本順先生、そして委員の岩上、以上三名でフィリピンの台風被災地を訪問致しました。私たちが訪問した地域は、昨年11月にフィリピンを襲った台風ハイアン（フィリピン名はヨランダ）で大きな被害があったレイテ島、サマル島、セブ島北部（フィリピン中部のビサヤ諸島と呼ばれる地域）です。今回の訪問の目的は、被災から二か月半ほどが経過している中で、フィリピン福音同盟（PCEC）による被災地支援の働きを視察し、日本の教会の支援がどのように用いられているのか、また今後どのようなお手伝いができるのか調査することでした。出発前から海外の被災地を巡ることは容易なことではないことを受け止めつつ、主が何を私たちに見せ、示して下さるのか祈りながら参加しました。

21日（火）午前9時半の飛行機で成田からマニラに飛びました。その日はフィリピン福音同盟関係の宿舎に泊めていただき、被災地訪問の準備をしました。翌22日（水）から被災地の訪問が始まりました。今回の視察旅行を案内してくださったのはフィリピン福音同盟・総主事であるエフライム・テンデロ先生と台風被災支援ディレクターのダニエル・パントーハ先生でした。

22日（水）の早朝、マニラからセブ島に飛行機で飛び、セブ・シティでパントーハ先生と合流してから、小型高速艇で海路4時間



PCEC からの支援で住居を再建した家族を訪ねた

ほどでした。主のあわれみで後半は時化も収まり無事にオルモックに到着できました。

オルモックは日本ではあまり耳にしない町ですが、レイテ島北西部（ちょうどタクロバンの反対側）に位置する港町です。現地に到着して、地域の牧師先生方と交わりの時を持ちました。夕刻、オルモックの町を徒歩で回り、オルモック牧師会のリーダーであるエリック牧師（P.1 写真のご一家）のフリーメソジスト教会を訪問しました。教会は貧困地区の中にあり、教会の屋根は修理が終わっていましたが、牧師館はまだ手つかずの状態、エリック先生ご家族は、教会の中で生活をしておられました。家を失った教会員の方々に牧師への支援物資を渡しておられ、エリック先生の犠牲的な奉仕の心に心を打たれ、また現地の必要の大きさと厳しい現実を目の当たりにしました。その後オルモックの牧師会の先生方が集まり、ともに夕食を囲んで交わりのひと時を持ちました。先生方一人一人から被災時の証しをうかがいました。それぞれ死の恐怖を覚えるような経験を通りながら、主が守ってくれたことを感謝して、とても明るく喜びと感謝に溢れておられました。また台風後、地域の方々が礼拝に出席するようになり、礼拝出席者が5～10倍にもなっているという報告もうかがい、主の御名を皆で崇めました。

文化や国民性の違いがあることも感じながらも、それでも先生方の明るく前向きな支援活動の姿勢に大きな感銘を受けました。

23日（木）の早朝、車でオルモックを出発して、フィリピン福音同盟の被災地支援活動（特に仮設住宅の供給）の様子を見学しながら、タクロバンに向かいました。途中、壊滅的な被害を受けた地域に何か所か立ち寄りしました。



この日の朝、母親の遺体が見つかった女性のために祈るテンデロ PCEC 総主事

一番印象に残っているのは、被災者の

方々が埋葬された墓地を訪問した時です。そこは遺族の方々の悲しみに包まれた場所でした。一人一人の生きてきた証を墓標に見ながら、多くの人々が大切な家族を失い、深い傷を受けていることを肌で感じました。これから長い時間をかけて復興に向かっていくことになると思いますが、被災者であり遺族である方々への心のケア・スピリチュアルケアの大きな必要があることを痛感しました。

午後、タクロバンに到着し、市役所を訪問してタクロバンの副市長、教会のリーダー、支援団体の代表、テンデロ先生方とのミーティングに参加させていただきました。副市長からタクロバンの課題として①政治的課題（フィリピン政府から支援金が下りてこない）②仮設住居の不足③子どもたちのトラウマケア④ビジネス・雇用の流出というとても深刻な問題をうかがいました。今後のタクロバン復興に向けて教会、支援団体、自治体が連携を深めながら計画を立てていくことが話し合われました。

24日（金）早朝、タクロバン空港からセブ島に飛び、すぐに車でセブ島北部に向かいました。ダーンバンターヤンという町は風による被害が大きく、倒壊し、また屋根が飛んでいる家が多く残っていました。ここでもフィリピン福音同盟の家屋修理支援活動の様子を視察しました。



レイテ島中部で PCEC 支援拠点となっている神学校で

こうして被災地のすべての視察を終え、翌日25日（土）夜に無事に日本に帰国しました。福音的な教会が一つとなって支援活動をする様子と地域社会に大きな支援を提供して

いる姿に大きなチャレンジを受けて帰ってきました。背後でお祈りをくださった皆様に心から感謝しつつ、報告といたします。

JEA 援助協力委員会ではフィリピン台風災害救援のための支援金の受付を6月まで継続しています。詳しくは日本福音同盟（JEA）ホームページ（<http://jeanet.org/>）をご覧ください。

(P.1 より続き)

ワークの重要性を改めて確認した。もちろん災害の後にネットワークが生み出されることもある。東日本大震災後の東北地域においても多くの教会ネットワークが生れ、尊い働きになっている。しかし事前に牧師たちが顔を合わせ、地域教会ネットワークが動いていれば、より迅速かつ効果的にお互いを支え合い、地域の人々にキリストの愛によって仕える働きを担うことができるだろう。

それが分かっているだけに、私たちは次の災害に向けて事前に近隣地域の教会ネットワークを作っておく必要がある。それはただ災害時に効率よく事を運ぶためという目的だけではなく、地域の教会がキリストのからだとして一つとなるため、この日本においても教会が一つとなってキリストの愛に生きるためである。「また、キリストを基として、全身はすべての節々の助けにより、しっかりと組み合わされ結び合わされ、それぞれの部分は分に依りて働き、からだを成長させ、愛のうちに育てられていくのである。」エペソ人への手紙4章16節。

私たちは地震の危機だけではなく異常気象に伴う様々な災害など、およそ想定していない危機にいつ遭うか分からない状況にある。同じ主を信じる教会が、ご近所の教会が、

災害に備えて手を取り合う。同じ教団の教会、日本福音同盟加盟の教会に限る必要はない。災害の備えに関しては教派・教団の枠を超えて協力できるはず。地域における教会ネットワークとしては、すでに東海地区や相模原地区においてモデル的な活動がなされている。最近では新座・東久留米・清瀬エリア、台東区、板橋区などで地域教会の防災ネットワークが生れている。今後はさらに各地域ネットワーク同士が連携してお互いに助け合う関係が持てるように計画している。危険性が高いと言われている地域のみならず、日本のすべての地域において、災害に備えた教会のネットワークが生れ、キリストのからだを組み合わされ、結び合わされて成長し、愛のうちに育てられていくように願う。

日本福音同盟の援助協力委員会は「教会から教会へ」の援助を基本理念として、教会から支援献金を募り、被災した教会に送る働きをになってきた。さらに「教会と教会」の協力の働き、地域の教会と教会がネットワークを築くことを勧めさせていただきたい。繰り返して言う必要はないが、日本福音同盟に入っていない教会とも、日頃から仲良くしておくことをお勧めしたい。

東日本大震災対策と今後の災害対応支援プロジェクト

2011年3月末にJEA理事会のもとに立ち上げられたJEA東日本大震災対策室(中台孝雄室長)は、2014年3月末でその活動を終了し、いくつかの継続支援案を援助協力委員会に引き継ぎました。3年間の活動報告および支援金収支については、2014年6月のJEA総会までに別途まとめられる予定です。3年間のお祈りとご支援、ご協力に感謝いたします。今後は通常の災害対応は援助協力委員会、想定される首都圏直下大地震、南海トラフ巨大地震などの大災害についてはJEA理事会のもとに常設される災害対策室が対応する予定です。

同じく2011年3月末に福音派諸団体を中心に立ち上げられたDRCnet(東日本大震災救援キリスト者連絡会、中台孝雄会長)は、JEAよりも広くカトリック、プロテスタント主流派、ペンテコステ系諸団体とも関わり、支援活動、地域教会ネットワークのハブ的な役割を担っています。DRCnetは組織的には昨年度からお茶の水クリスチャンセンターの働きの一部となり、2014年度4月からは日本語名を「災害救援キリスト者連絡会」として、東北地域の諸教会ネットワークとの連携と共に、今後想定される大災害への備えも視野に入れた活動を継続していきます。

JEAはDRCnet発足当初から中台孝雄援助協力委員長(当時)、品川謙一総主事が実務委員として加わり、ホィートン大学人道的災害支援研究所(HDI)の協力も得ながら、災害対応チャプレン養成、首都圏災害プロジェクト、国際神学シンポジウムなどのプロジェクトをDRCnetをプラットフォームとして進めています。

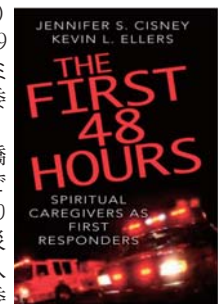
災害対応チャプレン養成に関しては、昨年チャプレン養成

トレーニングを実施して下さった米国救世軍のケビン・エラズ師による「危機対応・最初の48時間～誰もが知っておきたい心のケア入門」(岩上敬人訳)の日本語訳が5月に出版されます。9月にはこの本を使ったチャプレンセミナーを東海福音フェローシップ地震委員会で行う予定です。

首都圏災害プロジェクトでは、板橋地区、新大久保地区、墨田地区などで教会防災ネットワークが始まりつつあります。DRCnetウェブサイトの首都圏災害ページに掲載されている災害対応入門マニュアル(松本順JEA援助協力委員長作成)などの資料・ツールを充実させ、全国の各地域に教会防災ネットワークが作られていくように願っています。

国際神学シンポジウムは、反響が大きかった次世代集会を来年2015年に、通常国際神学シンポジウムは一年あいだをあけて2016年に開催する方向で検討を進めています。

災害対応は、特別な支援団体だけが取り組むものではなく、日本中の教会が日常の働きの中で、地域における「世の光・地の塩」として取り組むべきものだと思います。世界各地の災害支援を見てきたHDI所長のボーアン先生は「一番効果的な災害支援は地域社会の弱者に仕える教会の働きが災害前からあることだ」と語られました。イエスの愛を届ける通路としてこれらのことが用いられるよう祈りつつ、備えを進めていきましょう。(JEA総主事 品川謙一)



総務局から

- ◆ 2014年度・第29回JEA総会は、2014年6月2日(月)～4日(水)、静岡県掛川市のヤマハリゾート・つま恋で開催されます。今年度は理事が改選され、第6回日本伝道会議(JCE6、2016年・神戸)を含む新たな3年間に向けての新体制が発足します。主の導きをお祈りください。
- ◆ JEA総務局では、首都圏直下大地震への備えとして、これまでの記録、資料などをスキャンする作業を行っています。日常業務のクラウド化を進め、OCC事務所が機能不可の際に関西地区での災害対策室立ち上げの準備も進めています。



日本福音同盟

心をつなぐ福音の信仰のために力を合わせて戦い(ピリピ1:27)

JEA ニュース 45号 発行・日本福音同盟(JEA)
発行者・安藤能成 編集者・品川謙一
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-10CC#615
TEL: 03-3295-1765 FAX: 03-3295-1933
email: adminoffice@jeanet.org web: http://jeanet.org/